

頭髪部癌腫について、十全会雑誌, 29, 1, 大正 13.
11) 鈴木: 癰疽組織の癌腫, 日本之医界, 13, 22, 大
正12. 12) 山極: 癌腫の組織発生に就て, 癌, 1, 1,

明40. 13) 清水: 頭蓋骨穿孔を惹起せし頭部火傷癰
疽癌の一例, グレンツゲビート, 14, 10, 昭15.

顎 下 腺 結 石 の 1 例

公立豊岡病院外科 (院長 医学博士 辻井 敏 指導)

野 木 村 昭 平

(原稿受付: 昭和32年10月30日)

A CASE OF SALIVARY CALCULUS (SIALOLITHIASIS)

by

SHOHEI NOGIMURA

Toyooka Public Hospital, Surgical Clinic
(Chief: Dr. Bn Tsujii)

We report a case of a giant salivary calculus in a 21-old-female.

The stone was in secretory duct (WHARTON'S) of the submandibular gland and this stone, uneven round, weighs 3.0g and analysis revealed a high proportion of calcium.

The female was cured by the excision of the submandibular gland.

The postoperative course was quite favorable without forming a salivary fistula or facial paralysis.

緒 言

唾液腺結石に関しては、多くの報告があり 1926 年 Harrison は、1825 年よりの約 100 年間に 375 例を数え、Ivy. R.H. は自家経験 73 例に於て、66 例は顎下腺結石であり、7 例は耳下腺結石、男女の比は 5 対 2 で男子に多かつたと報告している。我国に於ける最近 10 年間の報告例は、約 56 例であり、中、顎下腺結石は 43 例、13 例は耳下腺結石である。又、男女の比は 33 対 17 で男に多かつた。尚大多數は耳鼻科関係の報告であり、外科医に依つて報告されたものはわずか 5 例にすぎない。

我々は触診所見で比較的巨大な唾液腺結石の摘出術を試みた症例を経験したので報告する。

症 例

患者: 山○渡○枝 女 21 才 (初診: 昭和 27 年 8 月

25 日)

主訴: 左顎下部腫脹

現病歴: 本年 1 月頃より左顎下部に無痛性腫瘍のあるのに気付き、其後食事により腫脹は増大したが、腫脹部を圧迫すると、舌根部より白色泥状性分泌物を排泄し腫脹は軽快した。今回は又数日前より左顎下部の腫脹を来し、次第にその程度を増強し、回復の様子を見ない。

現症: 左顎下部に境界明瞭な石様硬の約胡実大の腫瘍があり、皮膚との癒着はないが、基底部に対しては移動性を認めず、又圧痛無く、局所の発赤、温度上昇も認めなかつた。口腔底部を指診すると左下第 2 大臼歯部内下方の粘膜下に略小豆大の移動性に乏しい石様硬な結節を触れたが、これは其基底部に存する胡実大の結節の一突起と考えられた。又食事毎に局所腫脹の傾向顕著であること、及びレ線像をも参照して、顎下腺結石症の診断のもとに結石摘出術を試みた。

手術：昭和27年8月28日局所浸潤麻酔のもとに、下顎骨下縁に平行し、顎下腺部に皮膚切開を加え、筋層を切開して炎症腫大した顎下腺を鈍的に剝離し、結石と共に同腺を全摘出した。手術創は一次的に閉鎖縫合した。

結石：2.0×1.5×1.0cmの大きさがあり、突出部は口腔側に向つていた。

表面は凹凸があり、色は黄褐色で石灰結石であつた。

術後経過：術後7日目に抜糸、手術創は一次的治癒を営み、瘻孔、顔面麻痺等の副損傷を貽すことなく、術後第9日目に全治退院した。

考 察

1) 顎下腺結石はその部位が Warton 氏管の前2/3にある時には口腔内より摘出し、それより後部にある時は外側よりの手術が適当とされているが、この際腺体の炎症性変化が強く、又は閉塞遺残のおそれある場合には腺体自身も剝離摘出せねばなるまい。本症例に於ては触診上かなり後部に結石を触れたので外側より手術を行った。

2) 術後合併症として術中損傷により M. Triangularis の麻痺を残し、又は瘻孔を残すおそれがあると言われ、神経麻痺は下顎縁より充分離れて皮膚切開を行うと予防出来るとされている。本例では何等の後遺合併症を見なかつた。

3) 結石発生原因に関しては一般に炎症説が行われているが、Söderlund 及び Naeslund は、Saprophytic Actinomycetes に関係ありとし、41例の自家経験例全例にその存在を証明している。

結 語

比較的巨大的な顎下腺結石症の1例を経験したのでその概要を報告した。

文 献

1) 有沢保：日本耳鼻咽喉科学会会報，47；547，1941. 2) Harrison, G.R.: Surg. Gyne and Obst, 43；431, 1926. 3) Ivy, R. H.: Ann. Surg. 96；979, 1932. 4) 向山正秋：日本耳鼻咽喉科学会会報，48；474, 1942. 5) 佐々敏雄：日本耳鼻咽喉科学会会報，48；109, 1944. 6) 吉岡勝行：日本耳鼻咽喉科学会会報，54；84, 1951.

顔面部に発生したレックリングハウゼン氏病の2例

京都大学医学部外科学教室第1講座（荒木千里教授 指導）

大 谷 圭 三・長 崎 寿 志

（原稿受付：昭和32年11月19日）

TWO CASES OF VON RECKLINGHAUSEN'S DISEASE SHOWING MULTIPLE NEUROFIBROMATOSIS ON THE FACE

by

KEIZO OTANI, HISASHI NAGASAKI

From the 1st Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director; Prof. Dr. CHISATO ARAKI)

Case I. A 13-year-old girl was admitted to our clinic on Jan. 6, 1955, with multiple tumors on the face.

On inspection, the right half of her face looked grotesque with the remarkable thickening and swelling of the skin, as seen in elephantiasis. Several firm, encapsulated, smooth tumors, each of which was smaller than a hen's egg in size, were